

# 狛犬ガイドブック

## Vol.1 狛犬の楽しみ方

狛犬の魅力 .....	2
狛犬の個性 .....	4
個性派石工を見つける .....	18
地域のライバル石屋物語 .....	20
台座の銘を紐解く .....	24
狛犬の見つけ方 .....	28
狛犬とのつきあい方 .....	38
狛犬の撮り方 .....	42
狛犬は人と人を結ぶ .....	62

表紙・裏表紙：福島県中島村・羽黒神社の狛犬。昭和8（1933）年。石工・小林和平。この狛犬はダンプにぶつけられ阿像の尾が欠けてしまっていたが、東日本大震災で台座から落ちて大破してしまった。写真は倒壊前と建立時（裏表紙・左）のもの。

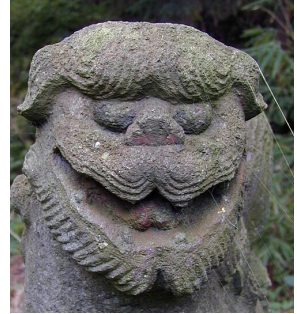


# 狛犬の魅力

「趣味は何ですか？」と訊かれて、即座に「狛犬です」と答える人は一体世の中にどれくらいいるでしょう。鉄道ファンやアニメファンのような数はいませんが、それでも現在では千ではなく万の単位でいると思います。

本書を手にしてしているあなたはすでに狛犬の魅力に気づいているはずですから、今さら説明するまでもないと思いますが、敢えて狛犬の魅力についてまとめてみれば、こんな感じではないでしょうか。

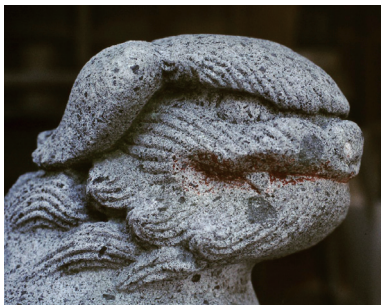
- ・実にさまざまな顔・形があって、飽きることがない
- ・想像を超えたユニークな狛犬に出逢える
- ・まだあまり知られていない作品を発掘したときの喜び
- ・石工や奉納者、建立された時代背景などに思いをはせる
- ・長くつき合うほど新たな興味や視点を見つけられる
- ・動かない、逃げないので確実に写真が撮れる
- ・理屈抜きに可愛い、楽しい、面白い



← 1986年、当時26歳の私が「狛犬趣味」を始めるきっかけとなった記念すべき狛犬（山梨県南アルプス市・穂見神社）。昭和14(1939)年の木製。このむっくりした愛らしい姿を見て、「狛犬にはいろいろある」のだと気づいた。

✓ 狛犬の顔は実にバラエティに富んでいる。下の2つは狛犬初心者が見ればどちらも「普通の狛犬」に見えるかもしれないが、実はかなり個性的な顔。

下左は新潟県小千谷市片貝町・浅原神社、明治18(1885)年。クシャットつぶした表情が独特。右は同じ小千谷市の日吉神社に同じ明治18年に建立された狛犬。作風が似ているので同じ石工かもしれない。





## いろいろな顔





## 狛犬の「個性」

狛犬を見始めてすぐの頃は、理屈抜きで「面白い狛犬」に目がいきがちになります。「なんじゃこれは！」と思うような変な狛犬に巡り会うのは実に楽しいことですが、そのうちに、美しさや技術の高さ、オリジナリティといった視点で狛犬を見るようになってくると、その狛犬の隠れた個性を改めて発見できます。

多くの狛犬は越前<sup>かむろ</sup>禿型、出雲型、岡崎現代型などの代表的な「タイプ」に分類できます。また、大宝神社<sup>だいほう</sup>の木彫狛犬や籠神社<sup>この</sup>の狛犬など、特定の狛犬のコピーと言えるものもあります。しかし、中にはどんなタイプにも分類できそうもない超個人的な狛犬や、「〇〇タイプだけれど、尾が特にいいね」といった特徴を兼ね備えたものもあります。狛犬の「個性」を見抜き、愛でる癖をつけるといいでしょう。

## 尾



尾は石工が最もデザイン力を発揮しやすい部分です。実にさまざまな装飾的工夫が凝らされていますが、当初はシンプルな紐尾や筆先型のものから始まりました。

1600年頃から登場する越前禿型や、村石工たちが情報不足のまま作り始めた「はじめ狛犬」の尾は多くが紐尾タイプでしたが、時代を経るに連れ、先がいくつにも分かれたり、凝った渦巻きなどの模様が加わって装飾的要素が増えていきます。

尾の形にはその時代の流行や石工の個性が表れます。都市部で作られた狛犬は、石工が得られる情報量が多く、流行やコピー元の影響を大きく受けます。浪花型は筆先型から団扇型になりましたが、その後はあまり変化しませんでした。江戸獅子タイプは当初は尾が立っていましたが、やがて優美さを表現する「流れ尾」が主流となっていきます。







### ・紐尾

←左：岐阜県高山市・賀茂神社のはじめ狛犬。尾はシンプルな紐尾だが、先を巻いているのがお茶目。

←右：栃木県日光市・足尾通洞鉦山神社。寛保3(1743)年。はじめ狛犬の名作。尾もこんな風にデザインしている。

✓下左：青森県弘前市・熊野奥照神社、寛文4(1664)年。代表的な越前禿型だが、おかつば頭のデザイン同様、尾も紐状を3つ束ねてみるなど、装飾的工夫が窺える。



←下右：新潟県三条市・三十番神社。髪型からして越前禿型だが、時代はかなり新しいと思われる。尾は紐尾ではバランスがとれないと思ったか、ボリュームを持たせている。紐尾から筆先尾に変わる過程を見ているようで興味深い。



### ・団扇尾

←左：大阪市・住吉大社内種貸社の典型的浪花型狛犬。文化9(1812)年。浪花型狛犬の尾は団扇型が基本になっている。欠けもなく、きれいに残っているのは素晴らしい。

←右：住吉大社。元文元(1736)年。団扇型にもいろいろなバリエーションがある。これは剣先型との複合技か。団扇尾

は、尾を広げることで装飾要素を増やせることに気づいた石工が始めたのだろう。浪花型狛犬に団扇尾が多いのは、丸顔団子鼻との釣り合いがよかったからかもしれない。



### ・立ち尾（筆先・土筆・笄・炎・剣先など）

蠟燭の炎や筆先のようにスッと上に向かって立ちあがっている尾は基本のような気がしますが、案外シンプルな尾の狛犬は少ないものです。根元に装飾を施したり、途中で枝分かれさせたりと、ほとんどが何かしら工夫しています。枝分かれして太くなるとだんだん団扇尾に近づき、どう呼んでいるのか分からないようなものもあります。

江戸では優雅な流れ尾が大流行しましたが、昭和以降、岡崎現代型や岡崎古典型（大宝神社の木製狛犬が手本）などの狛犬が増えると、尾はシンプルな立ち尾に回帰していきます。戦争が始まり、流麗な表現よりも、勇ましさや力強さを強調する世相を反映したかのようです。



↑上：新潟県十日町市・四ツ宮神社。大正 13(1924) 年。石工：小林斧七。下左：茨城県水戸市・水戸八幡宮。明治 25(1892) 年。下中：新潟県東蒲原郡三川村・若宮八幡昭和 12(1937) 年。いずれも立ち尾だがかなり工夫している。下右：靖国神社。昭和 8 (1933) 年。建築家伊東忠太の匠案で彫刻家新海竹太郎が原型を作り、名門石工酒井八右衛門が製作。シンプルな紐尾に回帰したことで、以後、全国の護国タイプ狛犬では尾を華美に飾らなくなった。

### ・江戸流れ尾

「流れ尾」は江戸獅子タイプ最大の特徴と言えます。浪花狛犬で尾が流れているものはほとんど見たことがありません。流れ尾が登場するのは 1700 年代後半ですが、最初に考案したのは誰なのか、実に興味深いテーマです。

→台東区・浅草神社。天保 7 (1836) 年。石工：田町 文三郎。江戸獅子を代表する大作。江戸末期にはほとんどの江戸獅子が流れ尾になっていた。

